

『1日3分！頭がよくなる
子どもとの**遊び**かた』出版記念

アマゾンキャンペーン プレゼント!

もっと遊べる
幻の原稿



新聞紙たたみ遊び

「何回折れば月に行けると思う?」

(書籍 p.55 のつづき)

紙を使った遊びで、ぜひ経験してほしいものがあります。どんな紙でも結構ですが、手に収まるサイズよりも新聞紙くらい大きな紙のほうが、インパクトがあります。

どんなふう遊ぶの?

新聞紙を1枚広げ、「半分に折ろう」と声をかけながら折っていきます。それをまた半分にします。それをまた……という具合に、どんどん半分にたたんでいきます。

さて、そうやって半分に折っていくとどうなるか。最初は順調なのですが、6回目くらいから大人の力でも折りづらくなり、7、8回が限界でそれ以上折れなくなります。紙の質や力の強さによって異なりますが、大人が折ってもそのあたりが限界です。ティッシュペーパーほどの薄い紙でも8回が限界です。これはちよつとした雑学ですが、大人でもそう聞くとつい試してみたくありませんね。ぜひお子さんに「あれ? もう折れないよ」という経験をさせてあげてほしいのです。そこからさまざまな話の展開ができます。

まず、子どもからすると、紙を折っていくとすごく分厚くなるという発見があります。「こんなに厚くなったね」と見せてあげ、すでに定規に親しんでいる子ならば測定してあげるといいと思います。ちなみに、紙の厚さを 0.1mm とした場合、8回折ったときの厚さは元の 256 倍で、 256cm です。「週刊少年ジャンプ」の厚さをイメージしてください。さすがに折れないですよね(笑)

次に、こんな問いかけをしてみてください。「何回折ったら月に届くと思う?」。

幼稚園生くらいならば、「100万回」「1億回」など、自分が知っているできるだけ大きな数を言うでしょう。正解は43回といわれています。

「40回くらいだよ」という、子どもは「うそっ!」「たったそれだけ?」「なんで?」と驚くはずです(大人でもそう思います)。それに対しては、「計算した人があるんだよ」とか、「不思議だよ」と返すだけで十分です。

実際は、こういう計算になります。一般的なコピー用紙(厚さ 0.08mm とした場合)を半分に折ると、その厚さは2枚分。さらに半分に折ると、その4倍。そうやって二乗計算を行っていくと、43回で70万kmになり月に届くというわけです。

もちろん、二乗の概念をまだ理解していない小さな子どもには、抽象概念を必要とするこの説明は難しいでしょう。ただ、「子どもだから言ってもわからない」と大人が勝手に判断してしまうのはもったいないですね。抽象的で高度な内容でも、実体験がすこしでもともなうと理解や納得のきっかけになることもあるのです。この場合は、新聞紙をたたんでいくという手作業がそれに当たります。

43回ってそれほど大きな数とは思えないけれど、実際に新聞紙は6回で折れなくなつた。なんでだろう？ 不思議だな……。科学分野で新しい理論や法則を導き出した偉大な研究者たちのきっかけも、最初はそうした素朴なことなのかもしれません。

実感がないことを事実として提示されることに、勉強や研究の入口やチャンスがあることを、私たち大人は頭の片隅に入れておきたいですね。

また、インドのさんすうの昔話が絵本になった、「1つづのおこめ さんすうのむかしばなし」(デミ著・さくまゆみこ訳/光村教育図書)もお勧めです。1日目に1粒、2日目は2粒、3日目は4粒・・・30日目は何粒になるでしょう？

2つ飛ばし遊び 「1、4、7……」(書籍 p.79 をくわしく)

もう少しくわしくお話しましょう。

1、3、5、7という一つ飛ばしの数え上げは、数学的な説明をすると数列にあたります。小学校高学年では規則性の問題(数表)と呼ばれ、高校で習う数学では等差数列と言いますが、たとえば「初項(はじまりの数字)が4、項差(数字間の差)が3、項数(数字が全部)が5であるような等差数列の和を求めよ」といった問題が出ます。こうしたタイプの問題は、ある公式によって解が導き出せるのですが、要は4、7、10、13、16という4からはじまる二つ飛ばしの感覚が基本にあつてこそ解けるものです。同じ間隔を飛ばして数えるんだから、間(≡差)は全部同じでその数を足していけばよさそうだ、という実感です。

つまり、数列も基本は幼児期の遊びに由来するのです。一つ飛ばしや二つ飛ばしの数遊びは、慣れると幼児でも簡単にクリアします。むしろ大人より子どものほうが速くなるくらいです。

肉は11遊び

「今日の晩御飯は11かぁ……」

(書籍 p.85 のつづき)

「足したらいくつ遊び」の姉妹編で、こちらは漢字を数字変換して遊びます。やり方はほとんど同じです。

どんなふうに遊ぶの？

「肉(2+9)は足して11だな」などとボソツとつぶやきます。食事どきや肉屋の看板を見たときでもいいのですが、脈絡なく唐突に言うのが子どもを食いつかせるポイント。

「さんまは3だね」「コロッケは5と6だから11だな、肉といっしょか」「ろくろつ首は6と6と9だから、えーいくつ?」「おとうさんは、とお、さんだから13だ!大きいね」「おかあさんは3だから負けー」「でもママは万と万で二万だから、お父さんよりずっと強いよ」など。

「夏目漱石の『三四郎』(346)は13か」というように、名前に限定した対決遊びもできます。「千三郎(1036)」「万二郎(10026)の勝ちだね」という感じで、数の多い名前を言い合う遊びは、数の単位である命数法に触れることができます。「億の次ってあるの?」「兆ってどれくらい?」といった疑問に答えつつ、「兆五郎より京一のほうが多いよ」「那由他や不可思議も数だよ」と豆知識を。そんな数の概念に興味を刺激される子もいます。

ノツてきたら、大きめの紙に数字を書くのも楽しいですよ。「1、10、100……京は1000000000000000000、無量大数は0が68個」、どんどん大きな数になっていく様子は壮観です。

ベストワン見つけ遊び

「バチカン市国の人口少なさっ!」

(書籍 p.85 のつづき)

数えたり、足したり引いたりしなくても、世の中に今存在している数字を眺めているだけで意外に盛り上がるものです。そういうアプローチから「数字博士」に成長していく例も少なくありません。

どんなふう遊ぶの？

図鑑や『しらべ図鑑マナペディアなんでも日本一』に代表される子ども向けの統計本を親子でパラパラめくりながら、「○○ってすごいね！」「○○が日本で1番なんだ！」と雑談するだけ。

もっと簡単にいえば、ニュースを見ながら「スカイツリーは634メートルもあるんだって」「日本で一番長い川は367キロメートル」と、日常の話題にするだけでも十分です。単位はわからなくても、「スゴイでっかい数なんだ」という感覚が数への関心を高めます。子どもは、「1番」が大好きなんです。

統計本やランキング本を眺めているうち、数字を軸に理科や社会の分野にも関心が広がっていきます。

『小学館の図鑑NEO+ぶらす もっとくらべる図鑑』（小学館）、『読んでみて楽しむ都道府県地図帳』（学研）、『朝日ジュニア学習年鑑2017』（朝日新聞出版）などがおすすめてです。『都道府県のクイズ図鑑』（学研）など、クイズとして親しむのも楽しいですね。

勝手に創作遊び

「1の絵の○○って変じゃない？」

（書籍p.116をくわしく）

お母さんが読み聞かせているうちに、お子さんがセリフや話の筋をすっかり覚えてしまい、まだ文字を読めないはずなのに、スラスラとよどみなくことばが口から出てくる場合がありますね。それは、「絶賛熱中中！」のサインです。

こうしたノリノリするときこそ、子どもの好奇心のままに絵本の世界を楽しみましょう。もしも、絵本から脱線してオリジナルのお話を語りはじめたら、「それで、それで？」「へえ、そういう展開になるんだ、すごいね！」「最後はどうなるの？」と、子どもの空想世界と一緒に味わってあげてください。「勝手に創作遊び」は、想像力を刺激し、言語吸収力を高めてくれます。

この「勝手に創作遊び」には、もう一つのやり方があります。それは、絵本に書いてある文章を読まずに、絵だけを見て親子で自由におしゃべりをする方法です。

どんなふう遊ぶの？

たとえば、『花咲かじいさん』なら、「じいさまを乗せて走る犬のシロ、おじいちゃんちのジョンに似てるね」「きんきんきらきらの大判小判、持ったら重たいのかなあ？」。親から仕掛けてあげると、子どももノツてきます。

絵本作家の友人に教えてもらったのですが、絵本は読む子の年齢に合わせてそこに描かれているものすべてに繊細なこだわりを込めているそうです。たとえば主人公が3歳の女の子だとしたら、同年代の子どもが共感しやすいような表情や身体の動きをあえてシンプルな線で描くといいます。小さな子の目には、その方がストンと入ってくるからです。そうした親しみやすさが魅力の作家もいれば、怪獣や忍者が登場したり、宇宙が物語の舞台になっているなど、子ども心をくすぐる独自の世界観で楽しませてくれるファンタジー作家もいます。

つまり、絵本に描かれている絵そのものに、子どもの心を魅了する情報がたっぷり含まれているのです。その情報を元材料にして、想像あふれるおしゃべりを楽しんでもみてください。

こうしたことは、多くの方がごく自然にやっておられることでもあると思います。ですが、親御さんがちょっと意識することで、何気ない読み聞かせの時間が子どもの頭をよくする時間になるのです。

この遊びは、なかなか文字になじめない子どもでも本を楽しみむ入り口になります。また、バリエーションとして、登場人物のセリフを勝手に変えて遊んでもいいですね。「桃太郎」で桃がどんぶらこと流れてきたときのおばあさんに「あれまあ、大きな桃だ。持てそうにないから、見送ろうかねえ」と言っ、子どもを「ええーっ！」と驚かせてみたりして。同じ話を毎日違うパターンにして楽しんでたご家庭もありました。どれくらい自由度をもって、絵本を楽しむかということがカギになります。

図書館おでかけ遊び 「大人のほうにも恐竜コーナーがあるよ」
(書籍 p.210 の Q&A を参考にしてください)

お子さんと本を出会わせてあげるのも、親御さんの大切な役目です。実践のポイントは二つあります。

- ①本がある場所へ連れて行ってあげる ↓ 直接的な行動
 - ②子どもがその本に手を伸ばすように声をかける ↓ 間接的な興味づけ
- 図書館、書店、病院などの本棚、児童館の本棚……。日常のなかにあるさまざまな場所をチェックして(①)、いろいろな声かけで関心をもたせる(②)。これが基本スタンスと覚えておくといいと思います。

どのご家庭にも身近なのが、地域の図書館ですね。絵本、幼年童話、児童書、図鑑など、たくさん本がこの世の中にあることを実際に見せてあげましょう。小さいうちは幼児図書コーナーでたっぷり本に触れさせてあげ、興味の対象がすこし見えてきたら、次のようなことを試してみてください。

「どんなふうに遊ぶの？」

恐竜に関心のある子なら、「大人の本のほうにも恐竜コーナーがあるよ」と声をかけてみます。読めるかどうか、理解できるかどうかではなく、見たがるかどうかで判断。

図書館には、大判写真集や専門書が揃っています。そういう本は、写真などのビジュアルが美しく本格派です。子どもの心は純粹だからこそ、本物に触れると感性が揺さぶられます。子どもからすると、本格的な大人の本が並んでいるコーナーを親御さんと一緒に歩き、本を眺めること自体がワクワクする体験なのです。

また、読み聞かせイベントを積極的に行う図書館も増えてきました。同じ年頃の子どもたちの反応が刺激になり、本に関心をもつきっかけになるかもしれません。

本好きになる「魔法のことば」教えます

「どうしたら本好きになりますか？」というご相談をよく受けます。

私がときどき感じるのは、「本好きにしたいという前に、そもそもお子さんを本嫌いにしていませんか？」ということです。お子さんが一人で本を読めるようになった頃、「仮面ライダーの本ばかり見てないで、こつちを読みなさい」などと、親御さんが

自分で選んできた本を与えようとしていないでしょうか。文科省推薦図書、課題図書、ご自身が幼少時に好きだった本。親御さんが読ませたい本はたくさんあると思います。でも、「これを読むべき」という思い込みをもったままだと、目の前のお子さんの関心や興味に目が行かなくなるかもしれません。そして、いつまでもお子さんを肯定してあげることができなくなってしまうかもしれません。

自分から本を読む子になるには、親子でたっぷり楽しむ読み聞かせの段階を経ることと、本との幸福な出会いのタイミングが必要です。そして実はもう一つ大事なことがあります。それは、「読めるぞ!」という自信が本人のなかに宿ることです。

「本は嫌い」と言っている子でも、好きなものなら手に取ります。仮面ライダー、ウルトラマン、プリキュア、妖怪ウォッチといった娯楽関連本でも、現に自分から本を開いて読んでいるのであればその事実をとらえて、こんなふうに言ってみるのです。「読むの速いよね」

このひとりで、「これも読書なんだ」と子どもは驚くのです。そうすると、「自分は本が読めるんだ」と自信が芽生えます。ちょっと難しそうな本にも手を伸ばしてみる挑戦心が生まれるのです。

将来、「学校の先生に言われた本を読むのが読書」とお子さんが勘違いしてしまうのが一番悲しいこと。そうならないため、まず親御さんは「文字を読んでいれば立派な読書」とゆったり構えていてください。

そのうえで、いろいろな場所で本に出会わせてあげてほしいと思います。

本屋さん探検遊び 「好きな1冊見つけておいで」(さらにつつき)

図書館の延長として、どんどん訪ねたいのが書店です。週末などに「本屋さんへ行く」ということになったら、次の三点でより楽しい時間が過ごせます。

- いろいろなコーナーを散策 ↓ 図書館同様、大人の本も紹介してあげましょう。
- 数回は品定め ↓ じらし作戦で「買ってもらえたー!」という喜びを高める。
- 「早く決めなさい」と絶対に言わない ↓ そのために30分から1時間は多めに予定を組んでおくのがベスト。

とくに利用したいのが、ブックオフなどの中古書籍を扱う店舗です。

どんなふう遊ぶの？

「好きな本を買っていいよ」と300円（ご家庭でご判断を）を渡します。親御さんも好きな本を探します。「何を選んだの？」「いいの見つけたね」「上手に買ったね」と、お子さんの選択を受け止めてあげる声かけを。

子どもは、こんなふうにして手に入れた本を気に入って繰り返し読んだりします。好きなだけ本を買ってあげたくても、費用や空間といった現実的な問題から考えて難しいご家庭がほとんどです。でも、こうした体験がときどきあると、お子さんと読書の距離がグンと縮まり、書店にでかけるのが好きになっていきます。

オーディオブック遊び 「どんなお話だった？」（書籍 p.120 をくわしく）

これまで繰り返しお話ししているように、ことばの定着や文章の読解に欠かせないのが幼児期の音声刺激です。ことばを音でとらえるという段階を経ているかどうか、将来の国語力に大きく関わります。国語はすべての科目のベースになるものですから、引いては全科目に影響します。

ですから、読み聞かせや親子で行う音読はたっぷり実践してほしいのですが、時間の制約というものがあります。そこで活用していただくというのが、オーディオブックです。

名作の朗読CDなどが充実している市販のオーディオブックのほか、アマゾン提供の「Audible（オーディブル）」もおすすめです。

どんなふう遊ぶの？

聞きたい物語を一つ選ばせ、「全部聞く」のか「10分だけ」なのか、終わり時間を一緒に決めます。これはダラダラ聞きを習慣化させないため。聞き終わったら、「どんなお話だった？」「どんなこと感じた？」「どんなところがおもしろかった？」「お母さんも気に入るかな？」などと会話を楽しみます。

こうしたアイテムを利用すると、耳から音を入れるという体験によって、お子さんのなかで音とことばがひもづけられていきます。

また、現代社会で暮らす子たちはどうしても視覚情報優先で、それに依存してしまいがちです。たくさん情報に出会っているようでいて、それら一つ一つの意味をとらえる前に流れてしまい、頭に残るものはわずかなのです。しかし、音からの刺激はいったん頭のなかでことばに置き換える作業が加わるため、頭にことばが残りやすくなるというメリットがあります。

そして何より、「読み聞かせは親がやるもの」という縛りを手放すことができます。

とくにオーディブルは、新見南吉の『ごんぎつね』に代表される名作絵本や日本の昔話、あさのあつこ作品などの人気児童文学から落語、大人向け教養書まで揃っているのが家でも重宝しています。月額1500円とそれなりに費用がかかるのですが、親は出勤時にスマホでビジネス書を2倍速で聞いて、子どもはお休み前に好きなお話を0.8倍速でゆっくり聞くといった使い方もできるので、コスパは最高です。うちの子は毎晩、きつちよむさんのとんち話と落語を聞いて寝るのが日課になって、親もすっきり楽をしています。

振り返り遊び

「それでその先はどうなったの？」

（書籍 p.120 のつぎ）

お子さんが自分から読書を楽しむようになったら、ぜひ振り返りのきっかけをつくってみましょう。

どんなふうに進むの？

まだ読んでいる途中なら「今どんなところ？」、読み終えたようなら「どんなお話だったの？」。お子さんが聞いてほしいのであれば「もつと教えて」と言ってもいいし、「主人公の子はどうしてそうしたんだろうね」と内容に踏み込んで親子で想像し合ってもOK。ただし、無理にしゃべらせようとしなくていいことが大切。本人がノッてくる範囲で結構です。

「そういえばどうい話だったかな」と振り返ってみると、頭の中にぼんやりと残っていたものがくつきりとよみがえってきて、脳にぱしっと焼きつくような感覚を子ども

もにわたせます。とくに物語の場合は、振り返りによって気持ちも動くので、感情面が養われてきます。子どもの話を聞いてあげるだけで、本の世界を掘り下げていけるのです。

さらにいえば、これは読書に限らず日常体験すべてにいえることです。「あのとき〇〇で□□なことがあったね」「△△ちゃん、どんなこと言ってたっけ？」とたずねてあげると、記憶をたどりながらことばで表現する力が培われてきます。

情報が多い現代だからこそ、流されず立ち止まることが大事。意外に思われるかもしれませんが、読書はそういう効果もあるわけです。

読書交換日記遊び 「いいところに気づいたね」(さらにつづき)

さっきの話は読書の振り返りを親子の会話で楽しむ方法でした。文章にして楽しむのが「読書交換日記」遊びです。

どんなふう遊ぶの？ (Кей困み)

ノートを1冊用意。読んでいる本の書名、今日の感想、読んだページ数などを書いて、親子で交換日記をします。また、読み終えた本の感想を記録として残すだけでもいいでしょう。まだ字が書けないお子さんでも興味をもつようなら、親御さんが代筆してあげると読書と識字への意欲が高まります。

お子さんの感想に褒めことばでコメントを返すのが、親子で楽しみながら続けるコツです。「いいところに気がついたね」「主人公も〇〇ちゃんと同じ気持ちだったと思うよ」と、本の内容に焦点を当てた返しや、「今日の文章はすごく説得力があったよ」「読むペースが速くなったね」というふうに、読書体験そのものに注目するコメントでも結構です。

交換日記によって、お子さんの読書体験が親子の共通体験に変わるのがよいところ。出張がちの友人は、お嬢さんと何年もこの読書交換日記を続けていて、ノートが10冊になったそうです。「僕の宝物なんだ」と嬉しそうに話してくれるのですが、お嬢さんにとってもまちがいなく宝物の時間ですよ。一度見せてもらったことがあ

るのですが、小学生とは思えない豊かな表現力で、ただただ感心しました。

目方で「んー」遊び 「今日のお買い物は何kgかな？」（書籍 p.84 のつづき）

重さの感覚は、体重計やキッチンスケールを使って、身の回りのものをどんどん量って身につけます。

「どんなふう」に遊ぶの？

その日買い物したものを体重計にのせ、「どれくらいだと思う？」と親子で言い当てっこします。また、キッチンスケールを用いて、「軽いイチゴを選んだほうが勝ち」と競います。重い物から軽い物までいろいろ量り、ゲーム感覚で楽しむのがコツです。

「紙の重さって量れるの？」「体重計で量れないものはどうするの？」。そんな疑問が生まれたら、g、kg、tといった単位について解説してあげてもいいですね。買い物袋では体重計が反応しないときは、何も持たずに自分が乗ってみて、その後買い物袋を持ってもう一度体重計に乗って、数字の違いを見てみるのもいいですよ。

「単位で遊ぶ」全体に使えることですが、『目でみる単位の図鑑』（東京書籍）といった本も参考にすると、ビジュアル的な情報から理解が深まります。

おつりチェック遊び 「レシート見てみてくれる？」（書籍 p.164 のつづき）

数が好きな子なら、買い物をしながら「今日は予算2000円だけど、合計が超えないかどうか見ててね」とチェック係になってもらいます。同時に、「全部買ったかな？」とリストチェック係もお願いしてもいいですね。子どもはいつも親にチェックされる側にいますから、親をチェックする側に回ると俄然張り切ります。そのようにチェックしていると、レジが楽しみになります。そこで「おつりチェック遊び」です。

「どんなふう」に遊ぶの？

レジで会計を済ませた直後、レシートを見せながらおつりが合っているかどうか確認してもらいます。おつりとレシートをもらう役目をお子さんに任せてもいいですね。

この応用編で、「ぴったり出せるかな遊び」もあります。788円払うときにぴったりの硬貨がなければ、803円を渡して15円と切りのいいお釣りをもらうことにチャレンジする遊びです。時間に余裕があるとき、レジが空いているとき、最近増えてきたセルフレジを使うときなどにお子さんに支払いをまかせてみましょう。

自分でお金を出せると、子どもはものすごく大人になります。お金にリアルに関わることで、数に対する実感が出てきます。硬貨と札の種類を教えるのも、実際の買い物を通して覚えていけば、理解もすぐです。

以上で幻の原稿はおしまいです。いかがでしたか？

本編あわせて約70の遊びをご紹介します。

お子さんの年齢や、好みに合わせて、ぴったりくる遊びが見つかったのではないでしようか。「頭をみくしように」なんて肩に力を入れなくても、子どもは自分で力を伸ばしていきます。

ですから、親子で楽しむこと。

それが一番大切で、一番素敵なことなんです。

小川大介